第171回コンサート山崎伸子チェロ・リサイタル（津田裕也p、2012年10月20日）から

新連載

クラシック音楽の穴場を探せ

コンサート・スペースに行こう

第1回●アートスペース・オー

取材・文・写真＝渡辺和
Text & Photo=Yawara Watanabe

いまや世界有数のクラシック音楽王国となった日本各地には、小粒ながら味わい深いコンサート・スペースが数多くあります。アーティストの息遣いを肌で感じられる親密な空間は、大・中規模ホールや劇場とはまた別の贅沢な音楽の場所。本連載では、音楽評論家、渡辺和氏とともにそんな音楽の穴場を訪ねていきます。第1回は22年の歴史を誇る東京・町田のアートスペース・オー。

螺旋階段のある陶器屋さん

新宿から急行で40分弱、小田急線とJR横浜線が交差する町田は、今やファッションビルや専門店が林立する南多摩の大繁華街だ。とはいえ、JRに乗換え横浜方面に一駅、降り立った成瀬駅から見上げる秋の夕空の高いこと。随分と郊外にやってきたぞ。

横浜線と直角に、町田街道と鳴瀬街道を結ぶ道を夕日のほうへ向かう。コンビニ、紳士服量販店、街道のラーメン屋や高校。訪れた10月20日、いつまでも夏の暑さが続いたからか、紅葉し切れずボタボタ落ちた柿の葉を踏みつけトラックが過ぎる。あたりまえの郊外風景だ。本当にこの先にコンサートをする場所があるのかしら。

改札口から5分ばかり歩いた右手に、周囲の住宅や商店とは異質な四角い銀色の箱が見えてきた。側面に据えられた大きな螺旋階段が印象的。ガラス張りの向こうに陶芸作品が並ぶ1階入口脇に、大きく「陶芸教室、器の店、ギャラリー&ホール」と記される。首都圏郊外の穴場コンサート・スペース、アートスペース・オー（Art Space "O"）に到着だ。

オーナー&プロデューサーの大橋善昭氏。
休憩時間には1階で飲み物が供されるうれしいサービスも

目利きがいるスペース

カウンターに白髪のダンディが座っている。喫茶店のマスターのようなこの紳士こそ、知る人ぞ知る名物プロデューサー、大橋善昭氏である。

一1階は器の店で、奥が陶芸教室です。2階がギャラリー兼ホール。全体が音楽と美術を併用してやる芸術空間です」

若い頃は趣味で学生オーケストラを指揮し、フルートも吹いていた大橋氏は、40歳を過ぎ一念発起脱サラ。縁もゆかりもないこの地に店を構えた。

「この器の店も、女房が全国の作家物を趣味で集めて並べています。上はその音楽版。私が良いと思った音楽を皆さんに100席で聴いていただく。それが基本。店舗だけでは経済的に難しいので、専門の講師を呼んで陶芸教室もやっています」

1990年に運営を始め、年間10回程のペースで演奏会を開催。公共や民間の助成は一切受けず、独立独歩で続けたシリーズも今回で171回目となる。マネージメント関係者や演奏家との直接の人脈があってこそ可能だったとはいえ、それだけでできることではあるまい。

■アートスペース・オー
〒194-0003　東京都町田市小川2-28-21
JR横浜線成瀬駅南口徒歩5分
www.artspace-oh.com/
〈問合せ〉042-796-3971（月～日曜日10～18時・水曜日休）、ohashi@artspace-oh.com
〈設備〉席数：100席（可動）／ピアノ：1台（ヤマハG3）／貸しホール有
〈今後の公演予定〉
・ASO第175回コンサート　2013年2月3日16時
鈴木理恵子（vn）&若林顕（p）デュオ
・ASO第176回コンサート　2013年4月29日
H.シェレンベルガー（ob）&M.アナ・シュース（hp）デュオ
・ASO第177回コンサート　2013年7月20日
堀米ゆず子（vn）&ヴィヴィアン・スパノーグ（vc）デュオ
チケット購入は直接電話、メールでのみ受付

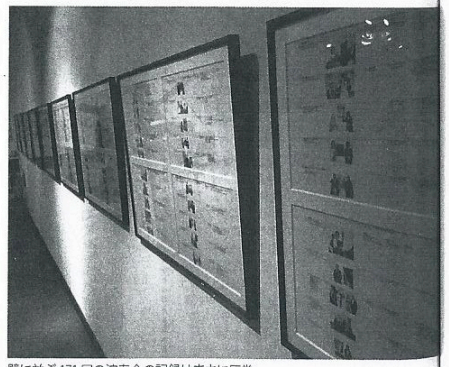
「その演奏家を聴くか、人として接し、納得したら来て貰う。そんなことが成り立つのか。実際、始めたときにはこんなに続くなんて思ってもいませんでした。でも、やっているうちに、また来てもいいよ、と演奏者が言って下さるようになって」

財政的には毎回ギリギリでもやれるところまでやります、と断言するプロデューサーに微笑む夫人が頼もしい。要は、陶芸も音楽も、目利きがいる空間、ということだ。

聴衆の気配の中で

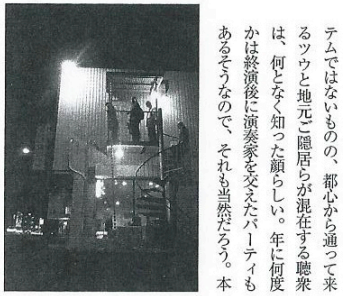
ではそろそろ、と大橋氏が席を立つ。気がつけばもう19時の開演まで1時間を切った。螺旋階段に人が並び始めている。プロデューサー自らが店の前に立ち、案内だ。郊外とはいえ広い駐車場があるわけでもない。鮮やかな月明かりの下、みんなノンビリと駅から歩いてくるみたい。

グルグルと階段を昇れば、いきなり目の前に小型のグランド・ピアノが置かれ、90平方メートルの四角いギャラリースペースに100の客席が並ぶ。ギャラリーにもなる総計40メートルの壁面には、過去171回の演奏会の記録が。アルゲリッチ&マイスキー&クレーメルの三重奏や、ウィーン木管八重奏団をこのスペースでやるなんて、なんと贅沢なこと。



壁に並ぶ171回の演奏会の記録はまさに圧巻

欧米の地方音楽協会のような会員システムではないものの、都心から通って来るツウと地元ご隠居らが混在する聴衆は、何となく知った顔らしい。年に何度かは終演後に演奏家を交えたパーティもあるそうなので、それも当然だろう。本物の音楽の周りに自然と集まるコミュニティがここにある。



大橋氏の挨拶に続き、もう何度目かの来演となる山崎伸子がチェロを抱え登場。若手のホープ津田裕也が神妙に付き従う。ベートーヴェンの「《魔笛》変奏曲」、シューベルトの「アルペッジョーネ」、ウェーベルンにR・シュトラウスのソナタと、都心の音楽ホールと同じ堂々たる演目だ。最前列の聴衆に弓が当たりそう。

「身近で聴けるのは演奏家同士の対話や息づかい。音楽家の持つ内面性までじかに吸収できる。大ホールでは味わえません」（大橋善昭氏）

なにせ街道沿いだ、外を通る車の音も入る。だけどこれだけ至近距離での熱演に、まるで気にならない。

「ここは客席が近く、人の気配が違います。それに、ホントにその演奏家を聴きに来てくれているので暖かい。気も抜けないですけど（笑）。演奏でいろいろあっても、それはそれで私の過程を見ていてくれているという安心感……というか、信頼感がありますね」（山崎伸子）